

ぶどう酒びんの ふしぎな旅



影絵 藤城清治
原作 アンデルセン
訳 町田仁
講談社 2010



今

年の読書運動のテーマは「不思議」。わたしが今月紹介するのは、アンデルセンの童話のなかの「びんの首」というおはなし。そのおはなしに影絵をつけて絵本にした藤城清治さんの『ぶどう酒びんのふしぎな旅』という本です。このアンデルセンの「びんの首」というおはなしみなさん知っていますか？物語のはじまりは、古ぼけた家の屋根裏部屋につるされた鳥かご、その鳥かごには、水のみのかわりに割れたびんの口にコルクの栓をしたものがつるされていました。この割れたびんが、この鳥かごにやってくるまでの一生。喜びや悲しみ、はかなさ、この部屋の鳥かごにきたのは偶然ではなく、必然だった、それがわかったときおもわず涙がこみあげてきます。このアンデルセンのびんの首を藤城清治さんが影絵にしたのがこの本。藤城清治さんの繊細で美しい影絵はこのおはなしをより幻想的にドラマチックにしています。このおはなしは藤城清治さんのいちばんすきなおはなしなんだそうです。この絵本は、1950年に暮らしの手帖社さんから（それを提案したのは朝ドラ『とと姉ちゃん』でも話題になった花森安治さん！）刊行されました。当時刊行されたものはまだ影絵はモノクロでした。そして、藤城さんの影絵の主体がカラーになってきた50歳くらいから、86歳の誕生日、ちょうど絵本製作60年目の記念を目標に今度はカラーで刊行しようと試みたものがこの本です。藤城さんも、この本を作っているとき、当時モノクロでつくったときの想いやいままで60年間の想いがこの物語とだぶり、涙しながら製作することもあったそうです。このおはなしを読むと、このびんもそうですが、命あるものだけではなく、身の回りのすべてのものにドラマや物語があるのかなぁと感じさせられます。あなたが普段使っているものや、着ている服、あなたのところにやってくるまでにはいろんなドラマがあり、そしてそれにはちゃんと全部意味があるのかなぁと考えてしまいます。そして、それは人だって同じだと思います。生きていなかで出会う人たち、友だちや恋人、先生、先輩、後輩...それはみんなちゃんと意味があり、出会うべくして出会った人たち、引き寄せられて出会った人たちなのかなぁと最近よく思います。そう思うと、人生や、人やものとの出会いって、不思議だなぁ、ドラマチックだなぁとわたしは思います。藤城清治さんが描き出す、切なくてドラマチックでふしぎな酒びんの一生をたどってみませんか？原作のアンデルセンの「びんの首」が気になった人はこちらもどうぞ。『アンデルセン童話集3』大畑末吉訳 岩波少年文庫 1986 『完訳 アンデルセン童話集4』 ハンス・クリスティアン・アンデルセン著 大畑末吉訳 岩波書店 1981

